

平成26年度 教育講演会
平成26年7月11日(金)

講師 平田 オリザ 先生

宇佐美先生:本日は台風一過とはいえ蒸し暑い中、教育学部主催の講演会にお越し頂き有り難うございます。

最初に主催者を代表いたしまして岩手大学教育学部長新妻二男より講師先生の歓迎のご挨拶を頂きます。

よろしくお願ひ致します。

教育学部長:教育学部主催の平田先生の講演会にご参加いただきましたこと誠に有難うございます。心よりお礼申し上げます。

平田先生のお名前をご存じ上げない方は少ないと思うのですが、といますのは岩手だけでも私が知っている範囲だけでも平田先生は確か被災した直後の2、3か月位で岩手でお目にかかっているのですね。

大学にもその時いろんな形でご指導いただいたのをよく覚えております。

加えて2年か3年近くなるかもしれませんが文科省で、いわき総合高校野演劇部、高校生たちが演劇をやった時に丁度私向こうにいたのですが、その時に平田先生にお目にかかっているのですが、そういう形で被災地の高校生の演劇指導なんかもおやりになっていることにその時初めて存知あげたということなのですが、本当に各地、或いは各箇所様々演劇を通しての子ども達そして大人との関わり、指導、助言をやらせていらっしゃる大変お忙しい先生なのだということをあえて今日ご紹介申し上げたいと存じます。

今日は、チラシを頂きましたがその裏側にも東北で演劇展を開催するという事で非常に地方にもかかわって頂いているという事です。

もう1点ですね、タイトルに「コミュニケーション」という言葉が入っておりまして実は今大学教育、特にわが教育学部は教員養成を主たる目的としているという大学ですけれども、学生だけで

はもちろんです、私たち教員側の「コミュニケーション大丈夫か」というのが問われる現実になっておりますし、そのこと自体取り上げて何かをするということがないまま現在までいますので、今日は表現力の一つとして「コミュニケーション」あたりについての我々学部関係者も大いに勉強させて頂ければと思っている所です。

ただ平田先生は盛岡でこれにありますように明後日演劇が入っているのですね、ご指導で参るといふ事もあってお忙しいところ無理にお願いして今回の講演会になっております。終わった後もそんなに時間がない中で演劇指導にお戻りになることもお聞きしておりますので、大変平田先生には本当に多忙な中お願いした経緯がございます。心よりお引き受け頂いたことに感謝申し上げたいと思います。

宇佐美先生:有り難うございました。

続きましてこの講演会の企画者と申しますか提案者でございます岩手大学教育学部副学部長の遠藤孝夫より講師の平田先生のご紹介を頂きます。宜しくお願ひ致します。

遠藤先生:皆さん、こんにちは。ここにお集まりの方々は平田先生のことを既にご存知の方は大半だと思いますので、あえて紹介するまでではないと思うのですが、講演会の慣例に習いまして平田先生のことを少しだけ紹介させていただきます。

とは言え、平田先生のご活躍は凄く多岐に及んでおりますので、本当にかいつまんでご紹介させていただきます。

平田先生は、1962年東京にお生まれになりまして国際基督教大学でご研究されまして卒業されております。劇作家、演出家そして数多くの作品、演劇作品を手掛けておられます。この演劇作品は国内外はもとより海外とりわけフランスにおきまして非常に高く評価されております。その一例だけあげますと2011年にフランス政府からレジオンドヌール勲章というのを贈られております。実は私この勲章わからなかったので調べて見ましたらレジオンドヌール勲章というのはフランス革命の後、かの皇帝ナポレオンによって創設さ

れたというので、フランスではとても権威のある勲章だと説明書きにございました。

平田先生は、旺盛な演劇活動をされる一方で、演劇活動で培われた「方法論」というものを演劇の世界に応用あるいは変化をして活動されています。その一環だと思いますが現在、大阪大学コミュニケーションセンター客員教授をされています。

さらに今年の4月からは東京芸術大学アートイノベーションセンター特任教授もされています。その中で特にワークショップ手法による教育活動に精力的に取り組まれております。

平田先生のご著書も演劇関係の本はもちろんですが、本日の講演に関連しますものとしましては「コミュニケーション力を引き出す演劇ワークショップづくりのすすめ」「わかりあえないことからコミュニケーション能力とは何」という本がございました。今年の3月に「世界とわたりあうために」という本も出版されています。参考までに持ってまいりましたが、このような数々の本が出ておりますので、今日のご講演を受けて本も手に取ってもらえれば幸いです。

最後に先ほど学部長からありました通り明日と明後日盛岡劇場で平田先生が主催されている「青年団」という劇団の公演がございましたので、で時間の許す限りまだまだ時間帯によっては余裕があるという風に伺っておりますので、是非なかなかない機会なので足を運んで頂ければ幸いです。

以上簡単ではございますが平田先生のご紹介とさせていただきます。

宇佐美先生：有り難うございました。それでは早速「わかりあえないことからコミュニケーション教育の現在」と題して平田オリザ先生のご講演を頂きたいとおもいます。

先生宜しく願いいたします。

平田オリザ先生：こんにちは。平田オリザです。ご紹介頂きましたように私は劇作家、演出家で作品を作って皆さんにお届けするのが一番の仕事なのですがけれども、縁があってこういったコミュニケーション教育、学校教育にもかかわっています。

今日はそちらの話をしていきたいと思います。

コミュニケーション能力、コミュニケーション能力と今ヒステリックなほど日本では言われているようになってきております。

これは経団連がやっている経年調査でこの人事採用担当者に「25項目の中から人事採用に当たって重視する項目を5項目選びなさい」と調査をずっとやっているのですが、これ2010年2011年、2012年の数字も出ているのですが、9年連続で「コミュニケーション能力」ダントツで1位になっております。2010年81%です。5社、4社が「コミュニケーション能力」を挙げています。2位の「主体性」が60%ですから、どれくらい差があるかという事がわかりますね。因みに「語学力」という項目があるのですが「語学力」何%だとおもわれますか？英語の先生がいらっしゃったらちょっとショックを受けますと思いますが、2010年の時点で「語学力」は3%です。もっとこまかくいうと2.6%ですから英語だけできても就職できない時代なのです。そのくらいの器量を「コミュニケーション能力」に求めている。だから「コミュニケーション能力」つけなきゃいけませんという話を今日したいわけではないのです。その「コミュニケーション能力」って何なのかという話を今日していきたいと思います。

まず先に、自分がどういう仕事をしてきたかという事を話していきたいと思うのですが、こういった中学校とか小学校で授業をしていきますと、これは今年の2月南相馬の原町二中福島原発が一番近い学校だと思います。あいている中学校でそこでやっている授業の風景です。

実はこの岩手大学教育学部附属中学校でも授業を、もう7、8年、どれくらいになるのですかね？授業をさせて頂いたことがあるんです。こういった教科書を作ってまいります。小学校と中学校の国語の教科書を作っていきました。中学校では2002年に採択されたもので国語の教科書は大体作るのに3～4年かかるので、98年か99年にご依頼があったと思うのです。三省堂という

出版社から演劇と国語教育の中に取り入れたいので協力してくれないかというので、そのころ私はまだ大学の教員ではなかったのですがそんなことができるかなと思ったのですが、高校演劇の指導なんかはよくやっていたのですが小、中学校はあまりやっていたので出来るかなと思ったのですが、お引き受けした理由がいくつかあります。一つはですね国語の教科書から戯曲というのがほとんどなくなってしまっているのです。ほぼ0の状態になっている。演劇界の側はこれを入れてくれ、入れてくれとずっと言ってきたのですけれども、言うだけであまり授業、そのプログラム作りとかですね教材作りにプロの劇作家が協力してきたかという、そういうことをあまりして来なかったのです。これでは社会的責任が果たせていないんじゃないかと考えた。

それから当然教材の中からなくなるのにはなくなるの理由があってですね、作家の先生によるとやはり時間がかかりすぎる。

一旦演劇に手を出すとすごく時間がかかってしまって、今の厳しいカリキュラムの中ではなかなかやれない。それからですね、若い先生方だと自分も習ったことがないのでどう教えたらいいかわからない、といった声が非常に多かった。これは逆にスパイラル状に演劇というものが国語教育の中から外れていくわけですから、これ危機的状況なわけです。

戯曲というのはですね、詩と並んで最も古い文学形態なので小説とか評論よりも前からあった文学形態ですから、それが国語教育の中から外れていくというのは由々しき事態です。世界的動向からみても、そういう事はあり得ないはずなのでこれはどうにかしなきゃいけないと考えます。

教材の側にも問題があるのではないかと考えます。私たち世代で言うと教科書に載っている戯曲というと「夕鶴」が一番の定番なのですが、因みに今年は木下順二さんの生誕100年に当たります。

木下先生と僕は生前大変お世話になって、本当に立派な方で人格が背広を着て歩いているような

大変立派な方だったのです。

「夕鶴」という作品もですね、非常に優れた作品です。戯曲として読んでも文学作品として読んでも優れた作品だと思います。

ただですね、あれを今の子ども達がやって面白いかというと、ちょっとまた別だとおもうんですね。まず機織りということから教えなきゃいけないし、あれ大体ですね、やると多分「鶴と与ひょう」しか面白くないですね。あと村の子ども達、ワイワイと言ってあまり面白くない。そこでですね、授業のコマ数少なくてできる、それから教室でできる、大道具、小道具、照明、音響一切いらぬ。そして全員が参加できる。でも学芸会のように1人1セリフ悪平等でもない、そういう教材が作れないかという事で現場の先生方と一緒に作ってきたのがこの教科書です。私が普段授業するときは実際はプリントを使って、因みにちょっと読んでみますね。

朝の教室：生徒たちが登校してくる。教室はワイワイうるさい。

生徒1：「ねえ昨日〇〇見た？」

因みに私のプリントでは生徒4：〇〇〇になっているんですが、プリントの方は違いがわかりますよね。生徒4になっていて教科書の方は生徒1になっているんですけどこれ、学生さん、なんで違うかわかりますか？ 凄くくだらない理由なんですけどもやるのは中学生なんで思春期ですごいてれちゃうんですね。生徒1が一番初めにあるとみんな生徒1をやりたがらないんですね。生徒4を一番初めにしておくと、中学生わけわからなくなってじゃんけんで決める。これ細かい工夫がされている。

「ねえ〇〇〇見た？」この〇〇〇にはテレビ番組の名前が書いています。

ここでフィクションとは何か、という話をするんですね。ですから「今日の授業は嘘ついてもいいよ、劇を作る授業だから嘘をついてもいいよ、普段の授業では嘘をつけば先生に怒られるんですが、多分うまく嘘をついた子は褒められるよ」というような話をする。「だから〇〇〇には自分が

昨日自分が本当に見た番組でもいいけれども、自分の好きな番組でもいいし、或いは友達と相談して決めてもいいよ」というような話をします。「見た、見た、見た」「見てないよ」「なんだよ」「しょうがないじゃないか、親父がプロ野球見ていたんだから」親父というのが出てきます。ここでまた聞くわけですね、生徒に「親父というのが出てきたんだけど、普段君たちは自分のお父さんやお母さんのことを友達に話すときに何と呼びますか？」いろんな子がいるわけですね「お父さん」という子もあれば、「父さん」という子もあれば、「パパ」という子も、「父上と呼びますか？」一応笑いをとるんですけど、滑ると悲惨なことになるんです。で「変えていいよ」という話をするんですね。例えば「親父」となっていますが、これ変えていいからね。「お父さん」「お父さん、いいんだけど自分が普段呼んでいる呼び名に変えてみよう。たださっき言った嘘でもいいんだよね。だから父上でもいいよ」と話をする。「ただ、滑ると危険だから気を付けてね」と話して授業に入っていく。

その次の「だせい」を「かっこ悪い」「嫌だ」と変えていいよと言います。えっと「だせい」はもともと「だせい」にしていたんですけども国語教科書でもともと「だせい」は無理です、と言われて「つまんないの」つまんないセリフに変えられてしまうんです。

その次に「わたしを見た」わたしを、だから自分のことをじゃあ何というだろう「わたし」「うち」「僕」「おれ」いろいろ言いますよね。これも「変えてもいいよ」という話をしています。

こうやってまずオリジナルの台本を作っていきます。1時間目のうちに発表します。ここで、面白いのはですね、小学校5、6年生から中学校2、3年生まで対象によく授業しているんですけど、小学生位だと中途半端に変える班が出てくるんですね。「変えていいよ」というと、どんどん変えていくんですけど「長野から来た〇〇」です。仕事の都合で引っ越してきました。東京は初めてです。宜しく願います。」「じゃあ、〇〇さんに

何か聞きたいことある？」「得意なのは何ですか」「国語と体育です」ここの所変えるんですね。「趣味は何ですか？」「もっと面白いこと聞けよ」「静かに」「前の学校ではスキー部にいました」こうなっています。この長野を静岡に変える班とかが出てくるんですね。「静岡から来た〇〇です」「前の学校ではスキー部にいました」まあ、静岡にもスキー部はあるんだろうな、ここのくらいはいいんですが、この後「スキーうまいの？」「そんなにうまくないけど」「スキー部だったんでしょう？」「静岡ではみんなやるから」、こういう中途半端に変えられる班が出てくると教える側としては有難くて「今、変だったよね」話をするわけなんですね。「何か途中までよかったけども、途中からおかしくなってきたんだよね。さっき、嘘をついてもいいと言ったけど嘘をついたから褒められるわけではないんだよね」と話をする。「嘘をついたから褒められるんじゃないかと、うまく嘘をついた子が褒められるんだよ。嘘ってすぐばれちゃうでしょう？ だから最後までうまく嘘をつかないとだめなんだよね」というような話をします。

あと因みにですね、長野から来たというのでスキー部にいたという話で「スキーやったことある？」「あるよ3回くらい」「え、いいな」「わたし、やったことない」「わたしもない」「じゃあ、3月くらいにいこうよみんなで」「〇〇ちゃんに教えてもらえばいい」「そうか、そうか」みたいな話で終わるんですけども。

岩手でやった時には、多分沖縄から来たという設定のプリントを持ってきたと思います。一応僕は、寒冷地仕様と言っているんですけども、雪の降る地帯では長野から転校生が来ても全く面白くないので、沖縄から来て水泳部だったみたいな設定ののもう一つあるオリジナルのプリントの方にはあります。

2時間目は、ワークシートというのを配ってこれで台本を作ってもらって3時間目に発表する。これだけの授業です。

私の作った曲だから私がやれば大抵うまくいくんですが、やはり現場の先生が一番関心を持って

いただけるのは、授業の参加率が非常に高いという事です。

東京や大阪の都心部で公立の中学校2年生で国語の授業を維持するのは本当に大変です。ものすごく学力差があるわけです。

漢字の書けない子から高校の受験準備全部終わりました、という子まで、一つのクラスにいるので非常に大変なんですけれども。

演劇の授業はですね普段作文を書けない子でも自分のセリフは自分で書きます。

話し言葉の方が本来ハードルが低いので「普段話していることでいいんだよ」というので書けるわけなんです。そこが一番のポイントで私は2009年から文科省のコミュニケーション教育推進授業の座長をしていたんですけども、文科省の方でもこういった最近の言葉でいうアクティブラーニングと呼ばれているものもありますね。

これで実は一番期待しているのは、ふたこぶラクダの下の方の子ども達のモチベーションが上がる、授業の参加率が高まるという方に関心を持っているんですね。

今、アクティブラーニングというディスカッション型授業とかワークショップ型の授業、どっちかというリーダーシップ養成とかエリート層教育に重点が置かれているように見えるんですが、実はその学力が劣っているという子たちの底上げの方に強い効果があるのではないかと私たちは考えていますし、文科省でも良心的な官僚たちはそっちの方に注目しているという事なんです。

話を元に戻しますと、そういう訳でこういう教科書を作る授業を進めてまいりました。ただ、当初はこういった形態の授業、まだ15年前ですから相当珍しくて色々ご批判もありました。一番面白いなと思った批判は「授業じゃあないんじゃないか」。教員が教えることが何もないというんですね。僕は、ずっとこの15年間「教えないでください」と言い続けてきました。

この授業の一番の眼目は子ども達だけの時と先生が来たときと先生はいなくなったんだけど転

校生というちょっとした他者がいる時で子ども達の話し言葉のモードが少しずつ変わっていくんですね。しかもその変わりかたも子ども達1人1人ちがう訳ですね。凄く言葉遣いが変わる子もいれば変わらない子もいる。そういう話し言葉の対応性というものに興味を持ってもらって話し言葉の学習の動力部分にするというのがこの授業の一番の眼目なんですけども、従来型の国語の授業のように「こら、先生が来たんだからそんな言葉づかいダメでしょう」と先に言語批判を押し付けてしまうと子どもたちの学びの機会はほとんどなくなってしまふ、という事なんです。ずっと「教えないでください」と言ってきたんですが、この15年前にですね国語教育の世界に入って行って一番私が驚いたことも教員が本当に教えたがるといふことですね。

「こんなに教えたがるのか、もうちょっとで子どものアイデアが出るころだよ」

というところで教えちゃうんですね。教え方も全国一律ですね。教員の教え方というのは「ヒントを出そうか」とかっていうんですね。それヒントでもなんでもなくて、その先生がやりたいことなんです。

大抵、表現教育というのは子ども達から表現が出てくるのを待つ勇気が必要なわけなんです。これ、なかなか待てないですね。怖いんだと思うんですね。教えている方が多分楽なんだと思います。しかしですね、表現教育とかコミュニケーション教育というのは基本的に子どもたちの自発性に委ねる部分が従来型の授業より圧倒的に大きくなります。待つ勇気が持てないこういった授業は進めて行けない、という事なんだと思います。それが非常に大きなポイントなのだと思います。後でまたもう少しこの点は詳しく話をしたいと思います。

実際に授業はどうなるかと言いますと、この2時間目のワークシートに書くということが授業のハイライトなんです。もちろん子供たちにとっては、3時間目の発表がハイライトなんですけれども、国語教育の視点から言うと2時間目の「読

む、書く、話す」が集約されていますので、ここがハイライトになります。私は今言ったように、出来るだけ距離を置いて見ている訳なんですけども。そうは言ってもですね、なかなか決まらない班があるので、そういった所にはアドバイスに行くわけですよ。朝先生が来るまでに何の話をするかなかなか決まらない班があるわけなんです。決まらない班にですね、「なんの話」って聞くとですね、大体シーンとなってしまいます。でもですね「今朝なに話した?」「いつもなに話すの?」問いかけだったならばある程度答えられる。何かの答えは返ってくるわけなんです。大現実には、優等生的子がですね「宿題の話をします」「運動会が近いから運動会の話をします」大体決まっているんです。当然黙っている子がいるんですね。黙っている子にまた聞くわけですよ「じゃあ君どう?」「じゃあ、君どう?今朝何話した?」「話さない」という子もいます。「話さない、寝ているから」「いいね、寝ている子も作ろう」でまた他の子に聞く「いない」という子もいる。「遅刻ギリギリに来るからいない、いないから何が話しているか知らない」「ああ、いいね、じゃあ遅刻する子も作ろう」になる。

3時間目の発表になる。そうすると、宿題の話を皆でしている班よりも宿題の話をしているやつ所でうつぶせで寝ている子もあれば、「ああ、やばい」と言って途中から張ってくるやつの方が演劇としては圧倒的に面白くなります。その時に子どもたちは「しゃべんないこともなの」「いないという事も表現なのかもしれない」という事を気づいてくれるわけなんです。子どもたちの中に表現という概念がわっと広がるような瞬間が出てくるわけです。

ただこれ、やっぱり従来の国語の授業から言えば多少逸脱したものですよね。

文科省に定めた国語というのは、柱は4つです。「読む」「書く」「聞く」「話す」ですね。「読む」「書く」「聞く」「話す」「話さない」ではないです。ましては、「読む」「書く」「聞く」「話す」「話さない」「いない」これではなくなっちゃいます。

でも私たちアーティストからすれば「話さない」というのは立派な表現です。「いない」という事さえ表現かもしれませんね。

私たちアーティストが学校現場に入っていくと、そういう従来型の教育の概念そのものに揺さぶりをかけるというのが一番重要な役割だと思っています。

今でも僕鮮明に覚えているんですけど岩大の附属中学校では非常に感動的な光景があったんです。いまだに色んなところの講演会に実際に使わせて頂いている話なんですけども、吃音の子がいたんですね。非常にクラスの雰囲気の良い教室で、しかも吃音の子がいた班も凄くいい班だった。最初の先生がいなくなったの後半部分をアドリブでやりたいと言い出したんですね。1時間目待ったんですね。アドリブだめなんですね。こうやって書いていくことが言語化し意識化していくことが授業の眼目なのでアドリブダメなんですけど、まあ1時間目は失敗した班が出ると教える側としては色々ネタにできるので、「まあ、いいよ、アドリブ本当はだめなんだけど、いいよ」といったんです。そしたら、案の定その吃音の所で止まったんです。ご承知のように吃音の子は緊張すればするほど言葉が出なくなりますから最後号泣しちゃったんです。

男の子で中学2年生、「はちゃ」と思ったんです。担任の先生が結構度胸がある方で大丈夫ですよという顔をし、ほっといて大丈夫です。たまたま最後だったので「これで終わりにします」どうなるかなとおもった。本当にいい班で多分担任の先生が普段からちゃんと指導なさっているだろうと思いますけれども、周りの子たちがその子に謝って「ごめん、ごめん悪かった、今度頑張ろう」すぐいい雰囲気になってきた。

2時間目になりました。2時間目、このワークシート。そしたらまた今度は、先生がいなくなったこの班は、先生がいなくなった後みんながけんかになるというアイデアを出してきた。なんでそんな難しいことに挑戦するんだろうと思うんですけども、その子が佐藤君としておきましようか。

佐藤君がですね、みんな書いていくんですけども、その子は「僕は無理こういう混乱するところでしゃべったりすることが苦手なので無理、無理」と言って「みんな、お前が何かしゃべらないと不自然だろう」みんな言って「どうしよう、どうしよう」そしたらある子が「じゃあ、先生が戻ってくることにしよう」先生が戻ってきて、佐藤君はずっとしゃべらないんですね。ずっとしゃべらないで黙っている、周りは喧嘩しているんだけど、先生が「佐藤、またお前かよ」誤解してその子を職員室に連れて行く

というオチを考えた3時間目の発表になります。段階ですね

みんな凄く注目して見ている訳ですよ

1時間目の事があったから、ここまでは順調に行って佐藤君も書いているセリフは普通に言えるから喧嘩になって喧嘩も凄く上手ですけども、佐藤君は喋らないんですね。皆どうなるんだろう、やっぱりしゃべらないんだろうかと思っていた所に、先生役の子がすごくうまくってですね、丁度いいタイミングでガラガラと入ってきて「佐藤、またおまえかよ」と言って連れて行って、大爆笑で終わって佐藤君も他の子もハイタッチで「やった」って感じで終わったんです。まあ、今でも年間で十数校は、そういう授業を全国でやらせて頂いているので子どもたちは可愛いし、表現は凄く楽しいですけど感動するという事はあまりないんですけども、これは感動しましたね。しゃべれないというマイナス札を自分たちでポジティブな形で変えて行ったんですね。

私たち教育に携わる者がどうしても子供にうまくしゃべらせたい、きちんと言わせたいと考えます。それはもちろん当たり前ですよ。きちんと喋れるのに越したことはない、吃音の子でもそれをきちんと喋れるのに越したことはない。でも別な生かし方もあるんだということも大人では絶対出ない発想ですよ。子ども達だけで考えた、自分たちで考えてそういう劇を作ったんですよ、これ非常に印象に残っていて、それ以降いろんな講演会で使わせて頂いているネタなんですけれど、

そういう事がありました。

私たちはですね表現というものを大人の側が概念を狭めてしまって子どもたちに強要することによって子どもたちの表現の可能性を逆に奪ってしまっているんじゃないのかという事です。

まあ仕事柄様々な教員研修の場に呼んでいただくのですけれども日本でも表現教育とかコミュニケーション教育、十数年二十年いわれてきたわけなんですけれども、表現教育って子どもの首を絞めながら「表現しろ、表現しろと言っているようにしか見えない」とよく申し上げる。凄く熱心な先生ほど自分が子どもを追い詰めていることをなかなか気が付けないわけなんです。だからそういう先生にそっと近づいて行って肩をたたいて、「まだその子は表現したいとおもっていませんよ」と言ってあげたいと思うんですよ。ここはですね、日本の表現教育、コミュニケーション教育の大きなポイントなんではないかと思っています。

私、仕事柄たくさんインタビュー受けるんですね、コミュニケーションについてマスコミはですねセンセーショナルな記事を書きたいから子どもたちのコミュニケーション能力著しく低下している。表現力が危機に瀕しているみたいなことを書きたいわけですよ。まずそんなことはありません。最初に結論言ってしまうと、今の子ども達コミュニケーション能力は低下していません。そんな科学的数値はどんな言語学者、社会学者に聞いてもありません。どっちかっていうと上がっているんじゃないかと皆、言います。良心的な学者ほどそういいます。大体そういう事を言うのは現場を知らない親父評論家たちですよ。「今の若者たちコミュニケーションになっていない」そういう人たちには「貴方たちよりも今の小学生の方がダンスはうまいと思いますよ」と言ってあげたい、いつも思うんです。

ダンスを踊るという事が自分の気持ちを他社に伝えるもっとも重要なツールの一つであるような民族とか国家、そんな国いくらでもあるでしょう。ブラジルとかキューバとか日本の中では琉球とか、そういう国に於いては私も含めた日本の中高

年の男性は最も表現力のない、最もコミュニケーション能力の劣った部族です。だって伝えられないんですから。ダンスで伝えられない。

要するに、不変的なコミュニケーション能力ってないんです。

国や民族が違えば或いは時代が違えば何をコミュニケーション能力にするかというのも様々なんです。コミュニケーション能力というのは、ただもう一つ特徴があって言語そのものがそうなんです。

言語というのは非常に自己中心的になります。自分の言語祈願が自分の思っているコミュニケーション能力を他人に押し付けるという傾向が非常に強く現れるんです。

僕は今日ここで学生さんがたくさん来ていただいています。僕自分の大学の学生たちによく言うんです。就活で苦しむわけですね。その時に「大変だよ、コミュニケーション能力ないないと言われるでしょう、反論していいんだよ」明らかにまず言葉の使い方として間違っている。

さっき言ったように、不変的にコミュニケーション能力はない、コミュニケーション能力ないなんて言う日本語の使い方は間違っている。だから、もし百歩譲ってそれを認めるとすれば、君たちは私が要求しているコミュニケーション能力がないという風に人事採用担当者は言わなきゃいけないんですよ。であるならば反論してもいいわけです。学生さんたち、就活している人もいるんでしょう？ 反論してもいいです。その時に、「私はあなたが要求しているコミュニケーション能力がないけれど、もっと他に素晴らしいコミュニケーション能力持っています」反論すればいい。ただ反論すると就職はできません。それが辛いところなんです。まずとにかく若者たちがコミュニケーション能力が低下しているという事は数値的にもないし、そもそも不変的なコミュニケーション能力はないんです。という事を前提にしながらこれからの話を聞いて頂きたいんです。じゃあ何も問題がないかということそんなことはないわけですね。何も問題がないのにこんなにヒステリックに

みんながコミュニケーション能力、コミュニケーション能力という訳がない。なんでこんなに問題にされるんだらうかという事を問題にするべきだ。僕はそれをいくつか取り上げてきたんですが一つはですね、単語でしゃべる子ども達の問題です。これは教育に関わっている、現場に関わっている先生方はよく御存じだと思いますが、小学校の高学年になっても単語でしかしゃべらない子どもが非常に増えています。子どもは幼児期は単語でしかしゃべらないわけですね。それを他者と出会う事によって文というのを獲得する。これは言語の発達過程です。ところが、小学校の高学年、中学校になっても単語でしかしゃべらない。実は、この子たちを見ていると、どう見てもその子たちの責任ではないだろうといつも思うんです。考えて頂ければわかると思うんですが、昔みたいに兄弟が多ければ「ケーキ、ケーキ」と言っても、まあ無視されるか何ともならないと思うんですが、今は一人っ子でやさしいお母さんで「ケーキ」というと、すぐケーキを出してしまう。もっと優しいお母さんだと「ケーキ」という前に出しちゃうでしょう。言語というのは、しゃべらなくていいことはしゃべらないように、しゃべらないように変化する、という特徴を持っている。だから「ケーキ」が出てくるんだったら子どもたちは「ケーキ」としか言わないようになります。「ケーキ」が食べたいのか、「ケーキ」を買いに行きたいのか、「ケーキ」を焼きたいのか、「ケーキ」をぶっつけたいのか言わなくて済む。これ、でも家庭だけの問題ではないですね。学校でもやさしい先生、それから友達同士はいじめはする方もされる方も嫌なので3~4人の非常に小さな完全にわかりあえる集団の中で行動しています。そういう温室のようなコミュニケーションの環境で育てておいて、高校、大学あるいは大阪大学の大学院に来ている。いきなり、はいコミュニケーション教育です。コミュニケーションないと就職できませんよ・もちろんほとんどの子は適応していきますが中には当然「聞いてないよ」という子が出るんです。「なんで、なんでケーキ出てこないの？ 今

までケーキと言ったらみんな出してくれたじゃないか、なんで出してくれないの？」という事ですよ。これ大学の教員間でよく笑い話のように言われることなんですけど、レポートを提出させてちょっと厳しく添削しますね、返します。そうすると必ずどの大学にも「先生私のこと嫌いなんですよ」というんですね。こっちは仕事だから好きも嫌いもないよ、と思っているんですけど必ずそういう子いるんですね、今。「どういうことでしょう」。要するに自分のことを解ってくれない人は、自分のことを嫌いな人だ。

通常の社会というのは、自分がいて家族がいて社会学でいうと大体150人位の知り合いがいる、という風に言われています。通常付き合う範囲が150人位だといわれている。皆さんの携帯の電話の記録している番号を思い出してください。そんなものでしょう。取引先とかいろんなものを除いて個人的な関係、最大で150人位です。それ以外の65億人は他者です。他者は、もちろん自分のことを知りませんし、自分も他者のことを知りませんこれ、ニュートラルな存在。ところが、家族の範囲が濃密になっているのでここ多分10人とか5人、自分のことを良くわかってくれる、「ケーキ」といえば「ケーキ」を出してくれる人なので他者、他の人たちみんな敵になってしまう。ニュートラル、マイナス、要するに自分のことを知らない人はみんな敵なんです。

豊かな中間層はないんです、ないために自分のことを良く知っている人、それ以外の関係なんです。これきついですよね。

この濃密な関係から一步外に出たら全員敵です、どうなります。引きこもるしかないですよ。だって敵なんだもの、家の外に出たら全員敵なんです。家の外に出たら他者でしょう、関係ない人です。本当は、そうなっていないという事です、一部の子ども達は。僕はこれが引きこもりの最大の原因だという風に考えています。或いはこういう事もあります。昨日私は仕事で奥会津の三島町というところに行って、ここは小学校が60人、中学校が30人と非常に小さな町なんですけども、一校

しかももちろんないです。ここは極端な例ですけども普通の都市部で小学校1年生から中学校3年生まで30人一クラス組み換えなしという学校が随分出てきています。少子化でそういうところで教員だけ頑張って「お勉強しましょう、話し言葉教育しましょう」と文科省が言っているからって「スピーチやろう、じゃあ太郎君前に出てきて喋ってもいいですよ3分間頑張るね、先生が良く聞いているから」というんですけどもスピーチにならないんです。なんでか、というと、太郎君以外の29人は太郎君のことをいやというくらい知っているんです。太郎君も何もしゃべることがないんです。

表現というのは他者を必要とするので教室に他者がいないわけです。こういうところでも私たちプロの演劇より多少可能性があるんじゃないかと考えられる。

要するに他者を演じあう事ができるわけですね。転校生が来ないように学校でも転校生を演じることができる。これが演劇教育の一つの価値なんではと考えられる。

問題はですね、単語でしかしゃべらない子が単語でしかしゃべれないわけではないのです。しゃべれるんだけどしゃべらないんです。しゃべれないのは能力の問題ですが、しゃべらないのは意欲の問題ですから、要するにコミュニケーションの能力が低下しているのではなくて、コミュニケーションに対する意欲が低下している。だって必要がないですもの。そういう社会を私たち大人が作ってしまった。子どもたちの責任ではないし、まして子ども達の能力の問題ではないという風に問題をとらえるべきではないかと思います。

私たち国語教育に関わるものは、今でも子どもたちの伝える技術を向上させるために様々な試みをしてきました。ディベートやスピーチ、グループディスカッションいずれもそれぞれ意味があったと思います。でも伝える技術をどれだけ教え込もうとしたところで子どもたちの側に伝えたいという気持ちがなければその技術は定着していかないと思うんですね。じゃあ、その伝えたいという

技術はどこから来るかという僕は、伝わらないという体験からしか来ないと思うんです。

今の子ども達に最も欠如しているのは伝わらないという体験なんだと思います。皆解ってくれるから、みんな察してくれるから。ですから、その伝える技術を教えるようなことから伝えたいという気持ちを持たせるような教育に教育の質を変えていかなければならない。じゃあ、具体的にどうすればいいかという一番いいのは体験教育なんですよ。障害者施設連れて行ったり、高齢者施設に連れてったり、外国の方とたくさんコミュニケーション取らせられたり、要するに自分と価値観やライフスタイルの違う人と出来るだけで合わせること。

そうなんです、公立の小学校、中学校でこれをやろうとするには予算がかかる、人員もかかる、意外と大きいのはセキュリティの問題でなかなか子供を外に連れ出すのができない時代になってしまった。

ここでも私たちのやっている演劇が多少でもお役にたてるんじゃないか。

演劇教育は、体験教育程の力はないです。

ただし、私たちは疑似体験をさせることができる、シュミレーションすることができるわけですね、そこに演劇教育の大きな役割があるのだと考えます。

ちょっと話を戻しますと、PISA調査皆さんご存知ですよ。教は教育学部の方だけでなく一般の方もいらっしゃっている。

一応説明しておくとおECDという経済協力開発機構がやっている世界中の15歳の子ども達が共通で受ける学力試験です。

これ、6回の報告が2000年代日本の子どもたちが8位から10位、10位から15位とギリ貧でなってこれが学力低下問題の議論のきっかけになりました。ただ、これはですね参加国数が増えている時代だったので本当に日本の子ども達下がったというわけではないんですね。

だめにする部分の議論が多かった。ただですね、まったく問題がないわけでもありませんでした。

よく言われることですが日本の子ども達白紙回答率が高かったという風に言われています。

先ほどふたこぶラクダの下の子の方の子ども達すぐあきらめてしまう、モチベーションが低いという事です。

もう一つは複数の解答のある設問に対して白紙回答率が高かったという風に言われています。要するに今までの日本の教育は教員が正解を抱えもっていて、それを当てさせるような授業をしてきたために複数の解答のある設問になるとなんて聞かれているのか、さえ解らずに日本の子ども達は白紙であきらめて出してしまう。逆に複数の解答のある設問というのは何か書けば大体点がもらえたり、部分点がもらえる設問がある。ここで外国の子ども達と差が出てしまったという風に言われています。

この中でも最も日本の教育にショックを与えたのが、落書き問題と言われる問題です。教育関係の方は何度も気になっていると思う。はしょって説明します。

ある人が家の塀に落書きなんかされてインターネットとかに投書した。別の人が「落書きもアートじゃないか、もっと世の中には醜悪な看板が設置されているからあっちを規制しろ」と投書した。

「さてどうでしょう？」みたいな設問だったんです。実際の設問は5つ位ちゃんとした質問があるんです。「さてどうでしょう？」と聞かれると当時の日本の子ども達は15年前の子ども達は、何を聞かれているかさえ分からなかった。

「落書きなんて悪いに決まっているじゃないか」ほとんどの子ども達は考えたと思います。僕、これ今も中学校や高校の生徒とのディスカッションの授業の時に題材によく使うんです。ちょっと設問を変えて彼らに聞きます。「もし、自分の家とか或いは公共施設に落書きされて、それでも許せるのはどんな場合？」聞いてみる。最近の中学生しっかりしていてちゃんと答えが出てくるんです。一番定番なのは「きれいだったら」「自分が気に入ったら」面白い答えは「すぐ消せる」大体いろいろ出てくるんです。そのうち僕の方から聞

くんですが「じゃあ嵐の桜井君が書いたのだったらどう？」ほとんどの女生徒は「いい」。「草薙君が酔っぱらって書いたのだったらどう」観光的な価値、裸の大將みたいな人が書いている。色々な意見出る。僕は今まで会った子ども達の答えの中で一番気に入っているのは「その塀が明日取り壊し予定だったら」、これいいですね。私たちも書く内容を考えるんですが、塀のことを考えたんですね。明日取り壊しはいいね。正に複数の解答が出てくる。その中でもこれは大学生なんですけども何千人に一人の割合で必ずこういう答えが出る。「国際国家だ」要するに落書きでしか表現できない国だ。命がけで夜中に大使館の塀に書いて、その大使館に勤務し「仕様がないなあ」単純に消せるかということ、OECDがPISA調査に求めているのは地球の裏側には、国家体制が違えば落書きでしか表現できない人があるんだという事に思いをはせることを15歳の子ども達に要求する。これが本当の意味での異文化理解論、グローバルコミュニケーションスキル。異文化理解能力というのは別に、マイクロシガポール支店の支店長になれるような人材を育成するのがグローバル教育ではないですから、そうではなくて人たちに思いをはせる能力をつけてくださいという事。

これのずっと1位になってきたのはフィンランド。最近ちょっと落ちてきていますが、フィンランドの国語教科書は日本語訳されて出版なんかもされています。特に学生さん興味がある方は見て頂いたらいいと思います。そこで、是非見て頂きたいのは各単元の一番後は演劇的な表現になっているのが非常に多いですね。

今日のお話の先を考えて人形劇を作ってみましょうとか、今日の物語の一番楽しかったところを劇にしてみましょ、今日のディスカッションを利用してラジオドラマ作ってみましょ。集団でやる表現を最後に持ってきている単元が非常に多いです。何でかというフィンランドに象徴されるヨーロッパの子ども教育の主流はインプット、感じ方は様々でいい、当然ですね。

同じ教室の中に異なる文化、異なる宗教の子

も達が普通に机を並べているので、感じ方を教員が強制することは無理なんです。また、それをしてはいけない。日本の子ども達だったら、落書きはダメにきまっている。ある種の道徳規範です。でも、その中でフィンランドですから当然、東欧圏から親が亡命してきたという子もいるわけですよ、「そうゆうけど、うちのお父さん10年間牢屋にいたんだよ」いるかもしれない。その子供に思いをはせる能力が要求される。インプットだから、バラバラでいいし、これ仕方がない。だけどそのバラバラな人間が一緒の社会を構成していかなければいけないので、アウトプット表現は、集団で一定時間内に出しなさいというのがインター・メツッドの規模なんですね。

これ従来型の日本の国語教育と正反対になっていることがわかりますね。

じつは、私たちは「作者が言いたいことは何でしょう。50字以内に答えなさい」○か×かみたいにインプットを相当極端に狭めておいて、そしてアウトプットは個人の自由だというので作文とかスピーチにまかせてきたんです。じゃあ現実の社会はどっちが近いですか、アウトプットがバラバラでいいという会社があったらあつてなくつぶれますよね。つぶれる前に製品開発ができない、会議はアウトプットを出さないという事になります。でも、どんな企業でも多様な意見は必要なのですよ。そこで大事なのはだれがまとめるかという事です。日本でなら、Aちゃん、Bさん、Cさん、D君、Eさん、様々な人がいて意見を出し合って、例えばBという結論になったら多分、この意見を言ったB君が褒められると思います。或いは、ちょっとユニークな意見を言ったDちゃんも褒められかもしれない。でも、フィンランドではそうじゃないですね。フィンランドではまとめたF君が褒められる。多分、いまこれいきなり日本の小学校とかでやったら子ども達文句を言うと思うんです。「えー、何も言っていないじゃん」「まとめただけじゃん」でも、まとめただけの子が実際いい成績つくんです。私たち多分ちょっと誤解があったと思うんですね。「欧米の教育

は、個性尊重だ」「ユニークな意見を言ったやつが褒められるんだ」そうじゃないんです。ユニークな意見が出るのは当たり前なんです。だって、いろんな文化とかいろんな宗教の背景が違うんだからユニークでもなんでもない、ただ違うだけなんです。皆違うんです。だから、誰がまとめたかが大事なんです。この話も全国ですと、日本の先生方真面目なので、「はあ、金子みすずですね」みんな違ってみんないいですね、というのですがそうじゃないんです。皆違って大変だという事をいいたいのです。皆違ってみんないいなら教育の必要はないでしょう。ほっとけばいいんだから、そうじゃなくて、みんな違って大変だからそれを乗り越えられる力をOACDはPISA調査を通して要求している。OACD経済開発機構がそれをやるという事は、要するにこれからは、どんな企業、どんな組織、どんな自治体、どんな国家においても多文化共生だ。色んな人種、いろんな民族、いろんな文化、いろんな宗教の人間がごちゃごちゃにいた方が最初はちょっと大変だけど最終的には持続可能な社会になりますよ。生物多様性と一緒ですよ。色んな種が混在していないと持続可能な社会にならない、一時的には良くなりますが最終的に勝ち組みも減ってしまう。生物多様性というのはそういう考えです。人間も同じです。なので、15才の子ども達に最初はちょっと大変だけれども最初の大変さと、乗り越える能力をつけてくださいというのがPISA調査の一番の眼目。これが最近よく言われる「合意形成」。本当の意味での「合意形成」。日本の先生方もう一つ大切なことは、一定時間内に答えをだす。大事なことなのです。集団で一定時間内に答えを出す。日本の先生方、とことん話し合うタイプです。とことん話し合えというのは、日本がこれまでほぼ単一の民族、ほぼ単一の文化でやってきたからできると思います。だから絶対言葉で話し合えばどっかでわかりあえると思っている。そうじゃないから一定時間内に答えをださなきゃないとことん話し合え、ほとんど根性論でしょう、体罰に近いですよ。そういうこと、普通にやってきている

訳です。学級で普通にやっている。今でもやっている。結論出すまでずっと残って、それは子どもの成長にとってはほとんど役に立っていない。少なくとも今の現代社会においてはそういう事は要求されていないですね。こういうものを私、協調性から社交性と呼んでいます。大体、劇作家とかになる人間はですね、「平田君は知っていることは集中して頑張るけれどどうも協調性に欠けるようです」小学校1年生の時からずっと通信簿に書かれていた人間が大体劇作家とか芸術家になるんですね。協調性がないですね、自分の好きなことしかやってこなかった。ただ演劇は集団でやる芸術なので社交性はあるんですね。どんな嫌な奴でも幕が下りるまでどうにかして上手くやるんです。プロの世界はひどいもので舞台上で「あなたがいなくて死んでしまうわ」と言っていた人が楽屋に行ったらそっぽ向いている人がたくさんいます。沢尻エリカみたいなばかりですね。あの子外でやるからダメなんでやらなければとてもいい女優なんです。これ、社交性です。しかし、これまでは社交性という概念は日本ではうわべだけの付き合い、表面上の交際と言ってマイナスのイメージだったのです。私たちは、心からわかりあえる関係をつくりなさい、心からわかりあえなければコミュニケーションじゃあないと教えられている。でも、日本中もう心からなんてわかりあえないんです、と言ってしまえば身もふたもないですね。昨日美島町の小学校、中学校に行ってきたんですけれど、まあ本当に北は利尻島から南は米子目島まで離島とか山間地に呼んで頂くことが多いですが、そういう所でまだまだ可愛いですが、素直ですね。そういう所に行って、今日大阪大学からいらっしゃって、先生いらして皆さん心強いですね。目をキラキラさせている子どもたちに「心からなんてわかりあえないよ」これじゃ教育じゃなくなってしまう。そうは言いませんが例えば、高校生にならこういう風にいます「心からわかりあえないんだよ、全ては心からわかりあえないんだよ、初めからは」これはですね、日本人のコミュニケーションに対する考え方の大きな転換点

に来ていると思うんですね、わかりあえることを前提にし、最終目的にしてコミュニケーションというものを考えるのかわかりあえない人間同志がどうにかして共有できる部分を見つけてそれを広げていくことをコミュニケーションとして考えるか私たち解らないことたくさんあるわけですね。パレスチナの子どもの気持ちもわからないし、黒いような人たちの気持ちもわからないですね。解らないからほっといていいという事ではないですね。解らない人間同志がどうにかして共有できる部分を見つけてこれを広げていくというのが外交であり国際監督。そうするとこれから否が応でも国際社会を生きて行かなければならない今の子ども達に協調性なくていいとは言いません。しかし、日本の子ども達まだまだ世界標準からして集団性が強い方なのですね。そうするとプラスアルファの能力、教育でつけて行かなきゃいけない部分としては社交性なんではないか、要するに異なる価値観、異なる文化の背景を持った人たちともどうにかして上手くやって行く、極端に言えば自分が嫌いな人自分のことを嫌いな人ともどうにかして上手くやって行くそして最悪の事態である戦争やテロを回避する、そういう能力が最も求められているはずなのです。そうであれば、うわべだけかもしれない表面上のことかもしれないけれども短期間に相手と価値観をすり合わせたりする演劇を作っていくという行為は非常に役に立つのではないかという事です。

ちょっとはしょりますね。そういう訳でコミュニケーション教育なのかということなんですけれども、要するに少子化とか核家族化とか情報化と地域社会の崩壊によって今までは自然状態で身につけられたある種のコミュニケーション能力が身に付けられない子が一定数出てきていることなのです。これはですね、偏差値とか関係ないです。大人との接触の量、他者との接触量なのですね。ですから、子どもたちの環境が非常に多様化している。盛岡なんてまさにそうだと思うのですがでも商店街とかで育ったか、団地で育ったか、セキュリティの強いマンションで育ったか、農村部で育

ったかによって大人との接触の量が徹底的に違います。兄弟の数が多いか少ないか、特に重要なのは異性の兄弟がいるかどうかで非常に大きな要素です。それから、親戚づきあいがあるかどうか、近所づきあいがあるかどうか、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしているかどうか、こう言ったことによって大人や年寄りとの接触の量がものすごく個人差がある。昔はですね、子どもが多かった時代は、一つの団地で一つの小学校とか大体同じような子たちだったから教員もまあまあ、そこは楽だったんですよ。でももうめっちゃめっちゃです。バラバラです。1人1人ちがいます。さっき言ったように偏差値と関係なくなります。私たち、コミュニケーション教育に関わる人間がよく言うんです。「中高一貫男子校、理系」これ、コミュニケーション三条要素と言われている。実際そういう所を出て大阪大学理学部か工学部で20才過ぎまで自分の母親以外に自分より年上の女性と話したことないという学生がいくらでもいます。昔だったらよかったと思うんです。勉強だけでできれば阪大の大学院に行って講師、助教授、教授になって多分教授に紹介してもらった同じように家庭環境で育った女性とお見合い結婚でもすればあんまり迷惑かけずに出世できた。「あの教授ちょっとかわっているね」位で済んだんです。でも、今どんな理系の研究室でも女性もいます。外国人の留学生もいます。当然そういう人たちともきちんとコミュニケーションとってもらわないと少なくとも社会のリーダーシップにタクトをとる立場の人間になれないという時代なわけです。こういったことは昔は自然状態の中で近所づきあいとか親戚づきあいの中で学んできたものなのですけど、そういうものがなくなってしまったという事です。

もう1回整理しますと、子どもたちのコミュニケーション能力上がっています。上がっている位なのですが、しかし世の中の要求はグローバル化でもっと上がっています、要求を。しかも子どもたちの育つ環境はこういった情報化とか少子化の中でどんどんコミュニケーション能力いらぬ方

へ、いらぬ方へ下がっている、このギャップ広がっているんですね。このギャップを埋めるには今の所、学校教育しかないんです。もちろん地域社会にも補って頂かなければならないです。けどもおそらくここは日本の現状でいうと学校が相当頑張らないとギャップを埋められないという状態。

もう一つ重要なことはこれまでは子どもたちは自然状態の、要するに遊びの中で得てきた能力です。だとするならば、こういった遊びのような要素をうまくトレースして学校教育の中に入れていく工夫が必要なのではないか、ここにも演劇教育や芸術教育の1つの大きな可能性があるのではないかと思う。遊びをそのまま遊びとして学校の中に入れることも僕はいいと思いますがそれではさすがにあまりにも非効率ですし、今の学校教育制度になじまないことなんですね、その中をうまく芸術教育という形で取り入れていく工夫が私たち教育に携わる人間にも求められているのではないか、そういう教材作り、そういうプログラム作りがこれから非常に重要になっていく、そこにワークショップ型の授業とかアクティブラーニングと言われるものの本当の意味で求められているものがあると考えられる。もちろん産業構造の転換とか国際化の問題も大きいですが、これは今日はしよります。それでですね、いろんなコミュニケーション能力あるという事ですね。

例えば、今文科省はグローバル、グローバルと言っている訳ですけども本当にうるさいですね。グローバルとリーダーシップとコミュニケーションだけ書いておけばいいのかみたいな感じですね。文科省も行政もですね。でも、今の学生さんたちが会社に入って一番最初に直面するのは世代間コミュニケーション、これに対するプログラムはほとんどありません。せいぜいインターンに出すくらいですよ。更にジェンダーの問題非常に大きいです。

例えば、この間も僕あるスーパーグローバルハイスクールとおった関西のエリート高校に教えに行っただけです。その子たちすごくちゃんとした教

育受けているんです。英語で臓器移植についてのディベートをすとかね。国際紛争について紛争解決についての手段をNGOの方々たちから学ぶとかそういうことを全部受けている。だけどワークショップやったら男の子とか女の子とか僕がよくやる仲間を見つけるという最初に好きな果物、リンゴとか果物とかってグループを作るのやるんですが、いきなり男女別れちゃって、スーパーグローバルハイスクール通っている高校2年生。どうするんですか。その子たちは途上国に行っているいきなり初対面の女性に「臓器移植についてどう思いますか」ディベートするんですか。そんな能力国際社会に求められていますか？ そうじゃないでしょう。まず、とにかく友達になる、或いは、自分のことを信頼してもらう。少なくとも自分が相手に対して敵意を持っていないという事を、特に紛争地帯はそうですけどそういうことをちゃんと伝えられる能力が求められるんです。特に異性に対しては女の子にも話しかけられない子がなんでこっち先に教えられるの？ めちゃくちゃですね。今の日本のコミュニケーション教育、でも現実です。

大体今、日本社会の最大な問題は、少子高齢化と人口減少でしょう。こっちの方が大事じゃないですか、どう考えたって、日本全体で、僕ね、スーパーグローバルハイスクールを作る前に、トランスジェンダーハイスクールを作れと言っているんですけども、でもやっている学校あります。トランスジェンダー。灘高校なんかは、トランスジェンダーしていますよね。性同一障害について学んだりしています。だから、やっている高校もあるんです。超エリートの高校に限られます。完全に逆転現象が起こってしまっている。

そうはいってもですね、グローバルコミュニケーションスキルもつけなくてはいけません。そして、つけます。

私も8年間大阪大学でそういう事をして、ここからが今の学生さんにとって大事なことです。

日本の企業に入ると社員研修、一週間もしないうちに別の能力を皆さん要求されます。これは日

本型のコミュニケーション能力です。「会議の空気をよんで意見を言うな」「上司の気持ちを察して動け」今まで自分の意思をきちんと異文化の人にも伝えられるような人間になりなさいとずっと高校、大学、大学院と言われて、社会にでたら…..めちゃくちゃですよ。子どものうちはみんな察してくれて「ケーキ」と言えばケーキを出してくれ温室のようなところで育てられ、孝行、大学とコミュニケーション能力がないと就職できない、一生懸命コミュニケーション能力を鍛え、又企業に入ると言われる。どっちだろう、みんな思いますね。こういうものを心理学では「ダブルバインド」と言います。ダブルバインド、わかりやすい例はですね、お母さんが子どもを散歩に連れてって近所の人に会って「うちの子は勉強できなくて、まあ体が丈夫ならいい」で、家に帰ったとたん「何この成績、恥ずかしいわね、お母さんもう外に行くの嫌だわ」という。これは大人にとっては内、外の使い分けでしょうがないですよ。子どもには区別がつかいませんから、これが激しく繰り返されるこれも心理学でいう所の自己喪失感、操られ感というものが生じて引きこもりとか人格障害の原因になるのではないかとされています。家庭の中でもこのダブルバインドが強いと引きこもりが起るわけですから、今の日本は国全体がこのダブルバインド状態になるわけです。当然引きこもりますね。当然、内向きになります。ただです、僕ダブルバインドだからダメだと言っている訳ではありません。これらを解消しろと言っている訳ではありません。そうではなくてダブルバインドというのは、これからの日本の若者たちから引き受けざるを得ない重視化のようなものだと思うのです。この極東の小さな島国がどうかしてこの国際社会に生き延びていくにはこれを引き受けざるを得ない。ただです問題、こんなことに悩むのは100年前だったら夏目漱石や森鷗外、超エリートだけ悩んでいればよかったんですね、あの天才夏目漱石がロンドンでノイローゼになったわけでしょう。あの秀才森鷗外がかのように生きると覚悟を決めて二重生活をおくるわけで

すよ。でも今の若者たちが、自分たちが何に苦しめられているかさえ分からずに苦しんでいる。もっと始末におえないのは企業の方です。まったく無邪気に若者たちに異なるコマンドを指し示す皆さんもパソコンいじっていて異なるコマンドを矢継ぎ早に入力したら当然パソコンはフリーズしますよね。

コンピューターは人間の脳に似せて作られている。人間も同じなのですね。異なるコマンドを矢継ぎ早に入力されると当然フリーズします。フリーズする以外自分の体を保つことができないから最後の安全装置なんですね。フリーズというのは、そうじゃなければ爆発しちゃう。だから引きこもるんです。引きこもり以外逃げ道がない。

どうかしてこのダブルバインドきちんと引き受けて、そしてそれを乗り越えて行かなければならない。もちろん他にも選択肢はあります。一つの選択は、「鎖国」ですね。鎖国はいいんですけど人口3千万位に落とさなければならぬ、江戸時代までもどれば鎖国は可能です。もう一つの選択肢は、明日から法律で英語を公用語にする。公用語だけではだめなんです。先生方も出勤したら全員ハグ、キス。これを法律で決める。完全にアメリカ化する。むりでしょう、私たちは日本語でコミュニケーションをとり日本文化の中で育ってきているんです。でも、国際社会の中で生きて行かなければならない。だから当然ダブルバインド起るんです。だったらそういう現実をきちんと受け止めてそれを乗り越える能力を子どもたちに身に付けさせる必要がある。これが本当の意味での今求められているグローバルコミュニケーションスキルと私は考えている。じゃあそれどうすればいいかという事なんですけども、答えはないです。一応私、劇作家なので話し言葉書くというのが仕事なんです。話し言葉、いろんなものがありますね。ちょっとここははしょって、一番大事な、会話の違いを意識すること、会話の違いを意識すること、会話ないわけですね。会話 = conversation. 英語では、はっきりとした違いがあります。日本語ではあまり意識されていませんで

した。日本語の辞書を引くとですね、「対話：1対1でしゃべること」と書いてあります。私自身の定義は「会話」：親しい人とおしゃべり、「対話」：知らない人との間の情報の交換や知っている同士でも価値観が異なる時の摺り合わせ。

日本は残念ながら分かりあう、察し合う会話の文化でやってきたんですね。ほとんど知っている人とか同じ価値観、同じライフスタイルを持った人とうまくコミュニケーションをとっていく。

ヨーロッパは異なる価値観、異なる文化が背景を持った人が背中合わせで暮らしていますから自分が何者であって、何を愛し、何を憎み、どんな能力を持って社会に貢献できるかきちんと説明しなきゃいけない。文化の違いは、良し悪しではないし、まして優劣ではないですね。私たちこの分かり合う、察し合う文化の中で素晴らしい芸術を生み出している。俳句や短歌、世界で最も短い詩の形とか生み出している。これ、守るべきことですよね。この労力があつたおかげで私たち多分アジアで最も早く近代化に成功し戦後復興成し遂げ高度経済成長を成し遂げました。成長期はいいんですね。一致団結しやすいから、こういう社会を英語で「ハイコンテクストな社会」と言います。コンテクスト＝くみ取りやすい社会

成長期はいいのだけでも今みたいに成長が止まってしまった時点で全員がいっぺんに落ち込んでしまうので持続可能な社会じゃなくなってしまいます。持続可能にするためには、多様性が必要なんです。多様性のためには、説明し合う能力が必要です。

もう一つ大事なことは、学生さんたちは是非覚えてもらいたいものは、「分かりあう、察し合う文化」国際社会に出ると少数派なんです。少数派だからダメという訳ではない、少数派の優位さもある。わたしが生きている芸術の世界ですね。

私は、冒頭でご紹介頂いたようにフランスでの仕事が一番多いですけども、僕がフランスの国立劇場から毎年仕事が頂けるのは、僕が日本人で日本文化を背負い日本語で戯曲を書いているからです。

もしここに背負っているものが何もなければパリには世界中からアーティストが集まってくるわけですから、英語も下手な奴、フランス語もできないダメなやつという扱いです。私は彼らの持っていないものを持っていて、しかもそれを彼らの文脈で説明する能力を持っているから私に仕事が来る。

要するに大事なことは、ダブルバインドをきちんと引き受けてこの分かり合う、察し合う文化を基盤にしながらかどうかして説明できる能力を身に付けていくという事です。これが日本人に必要なグローバルコミュニケーションスキルです。

日本人に必要なグローバルコミュニケーションスキルと欧米人に必要なグローバルコミュニケーションスキルは違うという事です。ここを引き受けない限り一歩も先には進めません。ここを引き受けない限り教員たちもここを引き受けない限り若者たちを苦しめることになる。アメリカ人のようにしろという事です。今の文科省のグローバルコミュニケーション教育の方向はそうです。さっきも言ったように40人のクラスの中に1人のユニクロシンガポール支店長作るためにあとの39人を犠牲にするような教育、しかも獲得目標が低い。せいぜいなれてユニクロシンガポール支店長だから、しかもこの人成績悪かったらすぐ交代させられてしまう。残りの39人コミュニケーション嫌い、英語嫌いになってしまうんです。なんの得もない、今のやり方ではということなんですね。ちょっと最後ははしります。

玉ねぎですね。

私は、仕事柄不登校の子ども達と付き合うんですね。不登校はいい子だった子がおおいんですね。それまで急に不登校になる。大体そういう子たちが言うには「いい子を演じるのが疲れた」というんです。

その子たちには「お前は、本当に演じたことがないくせにいい子を演じるのが疲れたというな」とからかうんです。

もう一つかならず言うのは「本当の自分はこんなじゃない」その子たちに本当の自分のことを見

つけたら大変なことになるよ。新興宗教の教祖になるしかないよ。大人は、例えば父親という自分、親と暮らしている子どもという自分、教員という自分、或いはマンションの管理組合の役員にされた自分、PTAの役員の自分、PTAの役員の自分、週末はボランティアのスタッフの自分、フットサルのフォワードという自分。

色んな役割を演じ分けながら、かろうじて人生の負担を前に進んでいますね。そんなこと大人はみんなわかっているのに子ども達には本当の自分を見つけなさいという。人間はそういうもんじゃないかという事ですね。玉ねぎというのは、どっからが玉ねぎでどっからが皮だという事はないですね。全体が玉ねぎを構成している訳ですよ。人間もそんなもんじゃないか。

これを演劇や心理学の世界ではペルソナというわけですね。ペルソナというのは、personの語源になった人格という意味と仮面という意味を兼ね備えている。仮面の総体が人格を形成しているという事です。

ただですね、今の学校教育の問題でいうとおそらく子どもたちにとって学校での仮面が重すぎるのでしょね。本来は、人間はいろんな仮面をかぶることによってバランスをとっている存在なのです。ところが昔は学校があって放課後ドラえもんに出てくる原っぱ、学年を超えた交流ですね。これは、子どもにとっての地域社会です。そして家に変えれば兄弟も多くここも一つの社会です。そうやってバランスをとっていたのが今は学校での時間が非常に長くて、部活もあって放課後もずっとラインで繋がっていると一つの仮面が重くなって体が傾いてきていって辛くなってきている。キャラズカラみたいのが起こったりとかまあ、不登校になったり、引きこもったりしてしまうということですよ。

「いい子を演ずるのが疲れた」と子どもたちが言っている問題を僕は10数年言ってきたんですが、その中で一番ショックを受けたのが秋葉原の連続殺傷事件の加藤被告がですね、犯行の直前に携帯サイドの掲示板に「いい子を演じさせられて

きた」と書いているんですね。「いい子を演じさせられる」最初「なんだ」と思ったんですね。「そんな日本語あるのか」とさえ思いました。「いい子を演じる」社会的声ですよ。演じさせられている」と誰にと思えますよね。彼は、母親似なんですけども。なんという操られ感、なんという自己喪失感、問題の本質は明らかです。日本では「演じる」は、自分を偽るとか嘘をつくというマイナスのイメージがまだあるわけです。そうじゃなくてプレーですから楽しいこと、ただこれを「演じさせられている」と感じた瞬間に重荷になってしまう。一つの仮面が重くなってしまふ。私たちは積極的に演じることを肯定的にとらえるような子ども達を作っていかなければならない。私の友人に京大の総長に選出され、びっくりしましたが山極寿一さんという非常に優れたゴリラの研究者です。人生の半分くらいアフリカのジャングルにいた方が京大の総長に、非常に期待も大きいわけですけど、ゴリラというのは一夫多妻です。父親ゴリラ=父ゴリラなんです。父親になると人格というかゴリラ格が変わるそうです。これは、ゴリラが人間の次に進化している一つの証明なんですけども、日本猿のような下等なサルだと餌を前にするとオスサルも子ザルと一緒に餌をとりあっちゃうんです。ところがゴリラはですね、餌を妻とか子どもに分け与える行動を示すんです。しかも、これは父親ザルになった瞬間から始まる行動なんです。オスザルになった瞬間から始まる行動で他のオスザルはしないです。これ明らかに演じているだろうと言われている。だって野生の動物だったら餌を自分でとるのは当たり前でしょう。それを分け与える行動をとるという事は明らかに無理をしているわけだから野生状態の本能から言うとこれ演じているだろうと考えられる。しかし、このゴリラでさえも演じ分けるということはしないそうです。演じ分けるという行動をとるのは人間だけです。ゴリラは、妻と子供に対する態度が違うという事はないです。でも皆さんは演じ分けていますね。

先生方の中で大学での自分と家出の自分が「お

れ、食えない男だから違わないから」これ相当社会性のない人です。本来ありえない。私たちは演じ分けている生き物だから。なぜなら、さっきも言ったようにいろんな社会に属することによってバランスをとるようにできている。私たち演じ分けるという能力を持ってこの複雑な社会を構成している。逆に言えば、複雑な社会が私たちに演じ分けるという能力を身に付けさせます。だとするならば、演じ分けるという事が人間にとって最も重要な能力なわけです。でも日本の社会ではそうになっていないですね。たとえば、Let It Go 子供たちはいくとすぐ歌ってくれます。「ありのままに」と訳してしまったんですね。Let It Go は、ありのままではないですね。どっちかという「受け入れる」とか「しょうがないな」みたいなのが Let It Go ですね。「ありのままに」と訳すのは日本らしいですね。「ありのまま」という自分はないですから、それは本当の自分がないと同じで「ありのまま」の自分はないです。それを「ありのまま」と訳した。自分たちのサッカー、相手がいるだろう、ブラジルでさえ1：7で負けるような世界で「自分たちのサッカーをすれば勝てる」「無理だろう」残念なことになってしまった。「本当の自分って何？」子ども達ですからいろんな自分が全部自分なんです。或いは、いろんな自分を演じ分けることが人間なんだと僕は子どもたちに行っています。ですから「いい子を演じるのが疲れた」という子たちに「もう演じなくてもいいよ、本当の自分を見つけなさい」というのは大人の自慢に過ぎない。教員の自慢に過ぎないですね。そうじゃなくて、教育の目的は、いい子を演じるのに疲れない子どもを作ることなんです。出来ることならば、いい子を演じるのを楽しむくらいにしたたかな子どもを作る。そうでなければ、このダブルバインドを引き受けざるを得ない日本社会において、そのダブルバインド状態を乗り越えることができない。

ここに、各国のコミュニケーション教育の課題があると考えます。

質問の時間をとるように言われていますので一

旦私の話を終わりますどうもありがとうございました。